

インドネシア華人のアイデンティティ再構築と社会ネットワーク形成

Reconstruction of Identity and Social Network Formation of Chinese Indonesian

中谷 潤子 (NAKATANI Junko)

本研究は、時代の変化の中で若い世代の華人アイデンティティの再構築をライフ・ストーリー・インタビューから明らかにし、さらにインドネシア華人としての社会ネットワークの生成の実態をとらえようと2013年から始めたもので、2015年は最終年度の3年目となる。

華人への同化政策を行ってきたスハルト体制の崩壊から15年を超えた中で、20-30代の華人の中には、インドネシア華人としての存在意義を自問し、社会での位置づけを考えている人たちが現れている。華人言語文化が解禁されたインドネシアにおける華人の立場や地位の変化という社会的文脈において、次代を担う世代の意識変容を掴み、彼らのアイデンティティやエスニシティについて再検討を行いたいと考え、調査を行ってきた。

1年目である2013年にはインドネシア第2の都市スラバヤにて若手華人へのインタビュー調査を行った。スラバヤでは、10代後半の大学生から40代までの主にスハルト時代が学齢期であった世代にインタビューできた。そこでは、華人アイデンティティが強いインドネシアンアイデンティティが強いのかは、世代ではなく家庭環境が大きく影響しているのではないかということであった。インドネシア社会において華人の地位の向上を多少意識するとはいえ、華人自身の意識も華人以外から見た華人への視線も、スハルト時代と大きく変わっていないともいえる。また、社会ネットワークについては期待したほど大きな潮流といえるものはなかった。このスラバヤ調査の結果については2014年の華僑華人学会で口頭発表を行い、また、2015年秋には学会誌に掲載されることになっている。

2年目である2014年には首都ジャカルタで同様に20-40代を中心にインタビュー調査を行った。これは、スラバヤでの調査結果と比較することのほかに、首都での流れを知ることと社会ネットワークの傾向を知るためであった。ジャカルタでの調査からもやはり、世代よりも家庭差が大きいといえることがわかった。また、首都であるジャカルタは様々な民族が混在して生活を送るメトロポリタンであることの影響も大きいので、この点について、スラバヤ調査の結果との比較を詳細に行う必要がある。

2地域での調査を終え、今年度は、10月末から11月頭に香港調査を予定している。科研調査で2年前に香港へ調査に行った際に、1965年政変に伴うインドネシア華人の香港移動の潮流を知った。そして、その子どもが今、30-40代を迎え、インドネシア華人ルーツの香港人として生きている。香港調査では、政変に伴う異動を経験した親をもつ、香港での2世がインドネシア華人としての意識をどのようにもっているかをとらえたい。

8月に学会発表のためにバンクーバーへ行き、移民とホスト社会との関連について強く関心を持った。そこで今後、様々なホスト文化社会へ移動するインドネシア華人を追うという研究へとつなげるための、課題やテーマの絞り込みも行いたい。